本と地域の情報誌
県北どらくろあ
第128号　2026年11月1日（毎月1日発行）

新・芸備線ストロール②

七塚駅

「応仁天皇の八幡様と牧草ロールが転がる原っぱ」

10月19日月曜日、朝の9時に車で自宅を出た。かなり早いが、列車が来るまでの時間をのんびり過ごすのも悪くない。備後三日市駅まで10分もかからない。駅の近くに標識がないので、土地勘のない人には捜すのが難しい場所にある。

台風の影響で曇天、雨が降りださないことを願った。細い車道の脇の空き地に車を停めて、高台にある鉄道までの坂を登った。8月17日に来た時は、田んぼの稲穂が首（こうべ）を垂れていたが、今は刈り取りがすんで藁（ひこばえ、二番穂）が生えている。群舞していた精霊トンボ（ウスバキトンボ）も消えている。

駅ノートを読んだり、ホームの周辺を見て廻ったりして時間を過ごした。紅葉している草木もあるが、これからが本番である。10時ちょうどの三次駅行きに乗った。先客が3人。運転席の横に、もうひとりJR西日本の制服を着た若い職員が立っている。研修だろうか。七塚駅まで1.7キロほど。2、3分で到着した。

ホームにコンクリートブロックと波型スレート材を使った簡易な待合室があるだけで、駅舎はない。駅舎だと勘違いした建物はあるのだが、全室がトイレで、駅名を刻んだ看板も設置されていない。

芸備鉄道が塩町駅（現・神杉駅）から備後庄原駅まで延伸したときに、七塚停車場として開業。大正12年（1923年）なので、すでに1世紀を超えている。ホームの裏手が民家の広い庭で、金木犀（きんもくせい）の大木が満開、甘い芳香が漂ってくる。おおぶりな富有柿もたわわに実っている。

駅ノートを開いて見た。「藝備線全驛下車訪問ノ旅通算四日目」という書き込みが凄い。当日の天候や列車の便を記録した後で「本日は残り、上川立、吉田口～狩留家、矢賀と下車する。さて、後半戦張り切って行こう。」、著名が「日本全國六千四百超驛下車した漢過酷停車場降人」。旧漢字が多いので、かなりのご年輩だろうか。とてつもない“先輩”がいたものである。

駅の出入口は、ホームの備後三日市駅方面の端にある。「ようこそ国営備北丘陵公園へ」の看板が設置されている。七塚駅が最寄り駅で歩いて20分程だが、実際に徒歩で丘陵公園まで行く人はほとんどいないだろう。バスを含めた車が定番だ。

踏切を渡って周辺を散策しながら、今度は反対方向の北に向かった。刈り取りの終った稲田の中に、背の高い草が生い茂っている土地がけっこうある。家畜用の牧草地だろう。刈り取った牧草をラッピングした白い牧草ロールがあちこちに転がっている。



簡易水洗式トイレは身障者用個室もある


700 年の歴史を持つ田原神社

国道183号線を渡って、山間の方に向かう。白い花が枯れて実をつけた蕎麦畑が、収穫のときを待っている。これから秋の新蕎麦のシーズンだ。

国兼川の近くの旧道を、下流方面に歩いた。黄色いセイタカアワダチソウや白いヒメジオンの花が満開で、モンキチョウの姿が目立つ。モンシロチョウは一羽も見られない。モンキチョウの雌は、実は黄色だけではなく、白色をしている個体もいて、モンシロチョウと間違えられることが多い。後肢に大きな紋があるのがモンキチョウで、紋がないのがモンシロチョウ。黄色ばかりだと雄が多い？蝶の世界も嫁不足か。

立派な石造りの鳥居の前に出た。石板に「田原神社」と刻まれている。杉林の中の石段を上る。幹回りの大きさが、神社の歴史を物語っている。狛犬がユニークで、尻尾を立てた構え獅子なのだが、深く前傾はしておらず、表情もどこか穏やかだ。



神社の名前も「下原」から「七塚」に変更

主祀神は、応仁天皇、仲哀天皇、神功皇后、仁徳天皇。角川日本地名大辞典によると、田原（たわら）山八幡宮として嘉歴3年（1328年）に田原村に勧請された。八幡神は、応仁天皇の化身とされる。応仁天皇の父親が第14代仲哀天皇で、そのあとを母親の神功皇后がつなぎ、第15代応仁天皇の後を息子の第16代仁徳天皇が継いでいる。親から孫の世代の皇族が祀られている。



カエルの合唱の中、公園の木の下で雨宿り

望みは小さく、今回の取材の無事を祈願した。オーダーメイドのコルセットを腰に装着しているのだが、しばらく歩くと痛みで動けなくなる。

国兼川の神祇橋を渡って、国道183号線に戻った。信号のある横断歩道を渡ると県道441号線で、中国縦貫道の方角に歩いた。牧草ロールを成型する場面に遭遇した。畑に転がっていたロール状の干し草を、トラクターの後ろの機械が自動でラッピングする。くるくると干し草の塊を回転させながら、器用にラップを巻きつけてゆく。

高速道路の近くにある七塚八幡神社に参拝した。石の鳥居には「下原八幡神社」と刻まれている。武田祐三著の「芸備線・中国山地の沿線物語」に、七塚町の由来が説明されている。七塚町は、昭和29年（1954年）の町村合併で庄原市ができた時に誕生した。江戸時代は下原村で、上原村と対になった地名だが、上原村は上原町になり、下原村は七塚町になった。牧場で有名だった「七塚原」から拝借したものらしい。

ちなみに「七塚原」という地名の由来をネットで検索すると、七つの塚がある原っぱ、塚は墓所のことである。なんだか金田一耕助が出て来そうだが、「星の降る丘」という意味を込め、夜空に輝く北斗七星を信仰の対象として名付けられたとする説もあるようだ。

七塚八幡神社の杉林も、かなりの大木だ。根元の土が洪水でえぐり取られたのか、ゴツゴツした根が剥き出しになっている。がっしりと大地を掴んで離さない。玉乗りしている狛犬が、愛くるしい笑顔を見せている。八幡神社なので、祀神は応仁天皇。取材の無事を祈願、備北丘陵公園まで歩こうと決意する。

丘陵公園に向かう大通りに合流すると坂道になる。何度も休みを入れながら歩いていると、雨が降り出した。折り畳み傘を差して、歩いた。ようやく、正面玄関入口に辿り着いたと思ったら、ゲートが閉まっていて、月曜日は定休日だった。行き来する車が少ないので、そうだなとは思っていたが……。

明治時代に設立された私立の「庄原英学校」、その校舎をモデルにしたという丘陵公園正門の建物を撮影して、引き返した。雨が強くなってきて、沿道にある小さな公園の木の下にもぐりこんで、小降りになるのを待つことにした。

木の幹に背もたれて、落ち葉の上に足を投げ出して坐った。何の木かはわからないが、葉が生い茂っているので完璧に雨水を遮断して、根元の落葉も濡れていない。雨に喜ぶカエルの合唱が響いてくる。ゲーロゲーロという鳴声は、ツチガエルだろうか。心身がゆったりして、自分が風景の中に溶け込んで行くような感覚に浸った。

（よし、帰るか）

いつの間にか雨が上がっている。

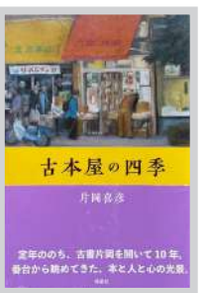
今月の3冊

どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

「古本屋の四季」

片岡喜彦 著　皓星社

定年した後、神戸に「古書片岡」を開いた店主のエッセイ集。かかった費用や売上等が詳細に書かれていて、同業者としては興味深い。「開店には約250万円が必要です。内訳は家賃・敷金で約45万円。古物商の認可申請費約2万円。兵庫県古書籍共同組合の加入金・会費で約35万円…」。つい自分の店と較べてしまう。



最初から道楽と割り切って開業、13時開店、17時閉店と無理はしない。開店時に退職金から用意した400万円と追加の20万円の資金が、10周年を前に35万円余りに減っている。それでも後悔はなく楽しそうだ。売れ残り本を処分できる組合の市があるのは羨ましい。

「なぜ『日本書紀』は古代史を偽装したのか」

関裕二 著　実業之日本社

天武天皇の命により編纂されたという天皇家の正史「日本書紀」には5つの謎がある。「誰のために書かれたのか?」「年代設定の矛盾」「なぜ天武の仇敵・天智を礼讃?」「聖徳太子の正体」「なぜ神武天皇の正妃が出雲神の娘なのか?」。天武の命という通説なのに、日本書紀には天武のことがあまり書かれていないのだ。



在野の歴史作家である筆者は、独自の視点でこれらの謎に挑んで行く。時代背景が簡潔に解説されているので、日本書紀の概略やその歴史が、自然と頭の中で整理されてくる。今まで絵空事だと言われていた出雲神話が、大きな役割を果たしているのも嬉しい。

「田村はまだか」

朝倉かすみ 著　光文社

札幌の深夜のバー、小学校のクラス会の三次会、男女5人が一人の男を待っている。母子家庭で、いつも誰かのお下がりを着て、虎狩りだった小学6年生の田村。「いつか、絶対、みんな、死ぬんだ」と泣いた問題児の理香に、「だから、生きているんじゃないか」と言って愛を告白した。今、二人は夫婦だ。

田村の思い出を語り合いながら、個人の回想へと話はながれてゆく。40 歳を迎えたそれぞれの人生が、しみじみと描かれている。華々しくはないが、懸命に生きている。それにしても、田村はまだか?最後に急転直下、とんでもない出来事が待ち構えている。田村は大丈夫か?



どら書房 ≪貸本屋システム≫

・店内で販売した本は、どら紙幣（店内専用通貨）であれば半額、現金であれば３割で買い戻します。※破損や汚れがあれば値引

・書籍購入⇒読了⇒どら紙幣と交換⇒新たな書籍購入、貸本のような感覚でご利用ください。

寄稿エッセイ

「物忘れ」

高柴順紀（菊栽培農家）

物忘れが日常になってきました。しかしそれでも何故か『名人伝』という短編小説が浮かんでくるのです。これは良く知られた『山月記』を著した中島敦の作品です。

物語をかいつまんで説明します。



菊栽培農家を取材中の筆者

中国が舞台ですが都に住む何が何でも天下一の弓矢（きゅうし）の名人になりたい男がいました。そこで男は当代一と言われた弓矢の名人の門下となります。当然ながら与えられた難題を少しずつクリアしましたが、ある時師匠の技に到達したと思った男は事もあろうか、この世に名人が二人いては面白くない、師を殺して自分一人が弓矢の名人になるんだというよこしまな考えに至りました。

そこで師に向かって矢を放つのでした。それを察した師は飛んでくる矢をすばやく自分の弓矢で全て落とします。ここでこの弟子は人間的にも危険な男になると恐れ、我々の遠く及ばぬ名人が居るからそこに行けと諭します。

師に教えられて訪ねた相手は温和な老人でした。早速男に技を見せたのです。なんと弓も矢も持たずして天空を飛ぶ鳥に向かって目に見えない矢を放ち、男の前に鳥を落したのです。これこそが弓矢の極みであると示したのでした。勿論男は老人のもとで修行を行い、何年かの後都に戻ってきました。都では天下一の弓矢の名人として知れ渡りましたが、「至射は射ることなし」と言って弓を手にすることはありませんでした。その姿に評判はますばかりでした。

ところが都に帰ってから四十年後、知人宅を訪れた年老いた彼はそこにあった弓矢を見て真顔で尋ねたのでした。これは何か、何に使う物なのかと。作者はここで筆を置いていますが単なる物忘れの小説ではないでしょう。作者の意図は私には分かりませんが、ただ老いつつある私には身につまされる結末です。近い将来菊の花を見て「これは何や?」と。

かって景気のいい時代、立派な菊を作っている全国の農家や産地を尋ね歩いた事があります。菊の修行ではなく花の会社のカタログに載せるルポを書くためでした。北は八戸から南は枕崎まで十数か所取材しました。名人という表現を農業関係で使っているのを見たことはありませんが、そんな言葉を使わなくても個性あふれる人々のこだわりの菊作りの中に感じることが出来た楽しい旅行でした。改めて多様な人々が世界を造っているのだと強く思ったものです。

物忘れに反発するように古い記憶がまだ残っているのでまだ大丈夫と慰めていますが、尋ねた先が今どうなっているのか気になります。それは花の世界が十年前ぐらいから生産者も出荷額も減少を続けているからです。特に菊は葬儀需要に特化しているので葬儀の簡素化傾向は致命傷となっています。菊忘れが自分だけにならないように願わずにはいられません。

どら書房無人野菜販売コーナー

新鮮で安全な地元産の野菜を店頭で販売
（値札のないものは百円均一）。
毎週水曜日の朝に入荷予定。

黒ニンニクの販売は諸事情にて終了いたしました。

寄稿エッセイ

「モンゴルが思い出させてくれたこと」

共同通信社大阪支社社会部記者　吉永 美咲



夏休みに、念願だったモンゴルを訪れた。世界でも有数の星がきれいに見える地域と知り、行きたい思いが大きくなっていたのだ。大阪からであれば空路で片道4時間ほどと、実は意外に近い！　猛暑日が続く大阪から、首都ウランバートル郊外にある空港に着いたのは、出発日の深夜だった。滞在中お世話になるガイドの女子大学生Nさんと建物の外に出ると、「ぶち涼しい！」。聞けば、モンゴルは8月中旬ごろから短い秋に入るそうで、この日も気温は10度前後だった。さっそく日本との差異を肌で感じた。

5日間の旅を通じて、モンゴルが思い出させてくれたことがある。それは「知足（ちそく）」の心だ。

2日目の夕方。「きれい」と言って、Nさんが空にカメラを向けた。赤やオレンジ、ピンクをない交ぜにしたような、一言では言い表しがたい空。しばらく2人で見入っていると、Nさんがふと「明日は暖かくなりそうね」と言ったので、「天気予報でそう言ってたの？」と聞いた。「ううん、空を見て。あの色だったら暖かくなりそうってわかるの」。ハッとした。そういえば幼いころ、私の周りにも、西の空を見て明日の天気を判断する大人たちがいた。私も一時期、空で天気を判断していたが、正確な天気を知りたくて、いつの間にか天気予報に頼って自然の声を聞き逃していたかもしれない。

遊牧民宅を訪ねた時には、いただいた命を無駄にしないモンゴル人の心を垣間見た。牛の乳から作ったバター「ウルム」に、乾燥させて保存をきかせたチーズ「アーロール」、塩味ミルクティーの「スーテーツァイ」をごちそうになったのだが、どれも同じ乳から作っているという。しかも、お酒まで乳から作っているというから驚いた。牛に限らず、羊や馬などの家畜の肉や内臓、乳は食用に、骨や皮は伝統住居「ゲル」や衣服の材料になるのだそう。他にも、モンゴルの人々はみな自然体でいる気がした。それはやはり、今ここにあるものに目を向け、それらを精いっぱい生かして暮らしているからではないかと感じた。

帰国の日。空港の搭乗ロビーでの別れ際、Nさんがひとこと。「またいつでも帰ってきてね」。モンゴルが、第2のふるさとの1つになった夏だった。

どら書房 郷土史資料コーナー（貸し出し無料）



地元の郷土史に関する貴重な資料を収集、販売ではなく貸し出しを行っています。
閲覧は自由ですので、興味のある方はご自分の目でご確認ください。
まだ全体の資料の整理ができていませんので、問合せについては対応できないときもあります。非営利活動ですので、ご容赦ください。

※「県北どらくろあ」のバックナンバーも揃えていますが、ネット上でダウンロードできますので、なるべくご自分でプリント、製本をお願いします。

ハロー注意報㉟
――進駐軍がいた町のはなし
お伊勢参りはＳＬに乗って

松岡 初枝

戦後も十年を過ぎた昭和三十年二月、私は祖母と共にお伊勢参りに行った。私が小学校入学の直前のことで、本来なら祖父母が行く予定だったが、祖父が急に仕事が入って行けなくなり、急遽私が代理で行くことになった。私はお伊勢さんがどこにあり、どのような神様がいらっしゃるのか知らないが、祖母に連れられて祖父の代参とあいなった。

当時、全国を対象にした旅行組織の社団法人“桜菊会”という団体があり、その規模は大きく、そうとうの人が参加する旅だった。埼玉支部、東京支部、関東六県から参加するので、四百人ほどの人に、桜菊会の役員、案内人（今ならツアコン）、医者、看護婦、薬剤師、娯楽係などの人々が、夕方が近づく頃の東京駅に集合した。集合場所は八重洲口の広場で、大きな旗が立っていた。私達を含めた入間川の旅行者は十名ほどで、近所のおじさんやおばさんが、大きなボストンバッグを持って東京駅へ行く。山手線に乗っていた時、私はやっと読めるようになった駅名の看板を、一駅ごとに読んでいた。御徒町の駅に着いた時「おかちまち」と読んだら、洋服屋のおじさんが「初ぼう、ここは、オカチメンコだぞ！」と言った。「おじさん、おかちまちだよ」「オカチメンコだよ」「コウちゃん変なこと教えちゃダメよ、はっちゃん、おかちまちでいいんだよ」祖母は洋服屋のおじさんを睨んで笑った。東京駅に行く前からこんな具合だったので、一週間近い旅の間、私はすっかり大人達のマスコットの様だった。



清水寺の入り口前。子供は私ひとり

東京駅八重洲口の一番端の特別列車専用のは、黒い蒸気機関車を先頭に、長い客車が停まっていた。「入間川の皆様はこちらですよー」と、若い案内人が座席を教えてくれた。向かい合わせ四人掛け、当時の座席は直角で、夜行列車でもリクライニングにはならないから、これから先の汽車の旅程は大変だなあと思われた。荷物を網棚に乗せて座席に落ちついた頃、列車内にアナウンスが流れた。「桜菊会会員の皆様ごきげんよう。これから伊勢、関西への旅が始まります。この列車の先頭車両は会の本部、医務室、放送室がございます。気分が悪い方は案内人と医務室へお越しください。放送室では御案内、又お歌を唄いたい方はお越しください。楽しい旅となりますように」。アナウンスと同時に汽車が動き出した。いよいよ長い旅路が始まった。

少し走って多摩川を渡り、神奈川へ入った頃にはもう外は暗くなりはじめた。配られた弁当を食べていると、おじさんが浪曲を唄う声がスピーカーから流れて来た。「旅行けば一駿河の国に茶の香り…」気持ち良さそうに唄っている。「おい初ぼう、唄っといでよ。浪花節よりゃいいさ」「えー、やだー」「初ちゃん、唄って来なさいよー」。渋々放送室へ行くと「おやお嬢ちゃん、童謡でもやってくれる？　皆さんお待たせしました。童謡歌手のはつえちゃんが唄いますよー、『みかんの花咲く丘』と『汽車ポッポ』でーす」。まわりの大人達に言われて唄いだすと、何だか気持ち良くなって、アカペラで二曲唄った。「よかったですよー！　又来てねー」。やけにニコニコした司会のおじさんに送られて放送室から出ると、客席の通路で沢山のみかんやお饅頭を渡された。「はつえちゃん良かったよ。又唄ってね」祖母と私は両手にいっぱいのプレゼントを渡された。席に戻ると「おう初ぼう、良かったぞ」「これ、皆で食べようよ」祖母はみかんとお饅頭を皆に配った。夜になる頃、丹那トンネルが近づいた。「皆様、トンネル内では窓を空けないでくださ

い！」。放送があると同時に真暗なトンネルに入った。汽車の煙のにおいが強く感じられ、長いトンネルがとても怖かった。

名古屋の駅で長く停車して、機関車用の水や石炭を積んだり、列車外に出て体を伸ばす人も多くいた。朝早く伊勢神宮に近い駅に着き、バスで内宮前まで行った。二年前の昭和二十八年に式年遷宮があったばかりの神宮の神橋や神殿は真新しく、木の香りが爽やかだった。広い参道の両側の木々が黒々として、奥まで見えない。それよりも、朝の寒さで身震いした。なにしろ神橋の上には真白い霜が下りていて、しっかり歩かないと滑りそうだった。六歳の私は多勢の人達の中で、皆と同じ所で参拝の作法を見ながら、天照大神（あまてらすおおみかみ）様に「今年から学校に行くので、お勉強がよくできますように…」とお願いしたことを覚えている。その後、あまりに寒かったので参道近くで食べた伊勢うどんが、とても柔らかで温かかった。寒い時の温かい食べ物ほど腹にも心にも優しいのを知り、その後行った琵琶湖近くで食べたしじみ汁も、忘れられない味だった。

伊勢から汽車に乗って京都まで行くと、京都駅の広場に“八坂観光”のバスがズラッと停まっていて、それぞれの県名が書いてあり、バスは長い行列を作って奈良まで行く。奈良は静かな所だった。今はインバウンド客で、静けさなどとは程遠いが、当時の奈良は公園も人より鹿の数のほうが多いくらいだった。東大寺の大仏の大きさ、太い柱の穴くぐり、法隆寺の塔の高さ、子供の私はどこへ行ってもびっくりするばかりだ。特に心に残っているのは、山焼きが終ったばかりの若草山が真っ黒だったことだ。「おばあちゃん、火事にならないの？」「山の下から一斉に火を点けるから大丈夫だよ。春になると新しい草が生えて、すっかり緑色になるんだよ」。祖母の言った言葉でなんだか安心したのを覚えている。

奈良から大阪に着くと、大阪城の大きさも石垣の大きな石にもびっくりしたが、城の天守まではエレベーターで登った。「お城は古いのにどうしてエレベーターがあるの？」と一緒に行った材木屋の若旦那のお兄さんに訊くと「はつえちゃん、大きくなって歴史のお勉強をする時は、このエレベーターのことは忘れなさいよ。本当の昔の姿じゃないからね」と教えてくれた。「そんなものか」と変に納得したが、観光地にはこんな場所が少なからずあったと思う。

最後に京都、清水寺の舞台から下を見ると、なぜかとても恐かった。バスガイドさんが「その昔、亡くなった人の死体を投げ落としたのです！」と説明したので、恐さの理由はその高さばかりじゃないと、変に納得した。このバスガイドの『マサコ』さんは、わたしをとても可愛がってくれて、私もマサ子さんの後をついて廻った。祇園近くの宿に舞子さんを呼んで、『京の四季』の舞を見たが、美しかった。

行きも帰りも夜行列車中泊という強行軍の旅だったが、疲れた大人の中で私が一番元気だった。この旅のことは後々まで心に残り、私の好奇心が膨らんでいったきっかけとなった。



バスの前で、疲れた祖母と元気な私



バスガイドのマサ子さんと私

搬舵虎姫（前編）

――現代御伽草子⑱

パントウフーヂ

あきふゆひこ　亜木冬彦

※船戸与一「満州国演義」にささぐ

夜明け前の高粱（コーリャン）畑に身を潜めた。収穫前の赤茶色の粒が密集した穂をつけている。ボルツ（カチカチの干し肉）の切れ端を口に入れてしゃぶり、空腹の胃をなだめた。腹が減ったら頭も働かない、万藤美虎（みこ）の子供の頃からの経験則だ。

空が白み始めた頃、畑のあぜ道を歩いて来る男がいる。前頭部を剃り上げて、後頭部の髪を辮髪に結い上げている。年齢は三十半ばか。美虎は素早く値踏みした。小柄だが、がっしりした体格をしていて力は強そうだ。朱雀幇の水餉（すいげ）だろう。防衛部門の責任者で、楊家村の様子を見に来たのだ。問題がなければ本隊に戻り、総員で馬に乗ってやって来る。

腋につるしたフォルスターから拳銃を抜き出した。モーゼルC96、複製品が多い中で、本物を持っているのは攬把（らんぱ）の張子耀と搬舵の自分だけである。攬把は馬賊の頭目、搬舵は福頭目という意味を持つ。搬舵虎姫、馬賊での美虎の通名だ。そして、張子耀は美虎の夫だった。

（大丈夫……）

自分のおなかをやさしく撫でた。新しい命が宿っている。

「動くな！」

高粱畑に潜んだままで、北京語で声をかけた。相手の動きが止まるのを待って、姿を現わした。男の目が美虎の左手のモーゼルに釘付けになる。指が腰のフォルスターに動いた。銃口を顔に向けた。

「動くなと言ったはずだ。三度目はないからな」

腰のベルトに差した懐剣を抜いた。中国山地のたたら製鉄で産み出した銑鉄を、備前の刀工が鍛えた名品だ。満州に向かう時に、祖母から手渡された。護身用の守り刀だと言われたが、ここでは殺さなければ自分が殺される。

「全部で人数は？」

しばらく間が空いた。

「訊きたいことが二つある。答えなくてもかまわない」

本気で撃つつもりだった。銃声が相手の本隊に聞かれてしまうのは不本意だが、命を失うよりはマシだ。殺意が男の背後に回り込んだ。美虎は男の背後に回り込んだ。

「あんた、女か？」

半信半疑の声だ。大柄な上に坊主頭なので、しゃべらなければ男と間違われる。質問は無視した。

「訊きたいことが二つある。答えなくても、男がもがいたが、首を切られたので声を出すこともできない。血だまりの中で、男が動かなくなった。殺さなければ殺される……、以前はそう自分に言い訳していたが、その必要もなくなった。張耀幇の仲間が見ている。非情にならなければ、隊は統率できない。

「二十六人」

うちの張耀幇よりも五人多い。

「楊家村を狙った理由は？」

総員二十六人の朱雀幇が、こんな小さな村を狙う理由がわからない。しばらく待ったが、沈黙したままだ。しゃべれば、自分の命が危うくなるのだろう。

（同じだ……）

背後から懐剣を振るった。倒れた

満蒙青年開拓団として入植した土地で農作業をしているときに、通りかかった張耀幇にさらわれた。馬賊に捉まった女の運命は決まっている。とくに、日本の女は特別なのだ。そのとき搬舵だった黄俊宇という大男に、農家の廃屋に連れ込まれた。

大男はズボンと下穿きを脱ぐと、性急にのしかかってきた。美虎は、男が羽織っている肩窄児（チェンチアル）の衿を両腕を交差して掴むと、締め上げた。子供の頃から柔術の道場に通っていた。

何をやってるんだと、男が黄色い歯を剝きだして笑った。三発拳で殴られた。鼻血が噴き出して、口の中に生暖かい血が溜まった。それでも衿を掴んだ手を離さなかった。徐々に力を入れて、頸動脈を確実に締め上げる。赤黒い男の顔が白くなった。大きく目を見開いて、恐怖が浮かんでいる。再び拳を振り上げたところ

で、男の全身が弛緩した。落ちたのだ。

美虎はすばやく体を入れ替えると、男の背中にドスンと腰を落とし、腕を首に回して捩じり上げた。のけぞるように全体重をかけ、必殺の思いで力を込めた。首の骨が折れる鈍い音がした。

すっ裸のままで、廃屋の外に飛び出した。焚火を囲んで酒盛りをしている連中に向かって、ゆっくりと歩んだ。月光の下に豊満な裸身をさらして、仁王立ちした。座が静まり返る。

「次の相手は誰だい？」



挑発するように怒鳴った。

「あたしを抱くのは、命がけだよ」

晩秋の寒風を浴びても、体が燃えるように熱い。

拍手しながら立ち上がった男がいた。攬把の張子耀だ。

「殺したのか？」

日本語だった。無言で頷いた。

「新しい搬舵に乾杯だ！」

隊員が歓声を上げて、高粱酒の入った椀を掲げて飲み干した。

本隊に合流すると、朴恩宇（パクウヌ）、朴時雨（パクシウ）兄弟が笑顔で出迎えてくれた。二人とも、小銃のスリングをたすき掛けにしている。チェコスロバキア製のＶｚ・２４短小銃、モーゼルＧｅｗｅｈｅｒ９８をベースに開発された信頼性の高いボルトアクションライフルだ。まだ少年の面影が残る童顔だが、凄腕の狙撃手（スナイパー）だ。

満州に入植した朝鮮部落の生き残りだ。匪賊に襲撃されて、目の前で家族が惨殺された。匪賊は徒党を組んで略奪や暴行、殺人を行なう盗賊で、金をもらってそれを防ぐのが馬賊だが、ときには両者の立場が入れ替わる。

朴兄弟は、かたことの日本語がしゃべれたので、美虎が拾った。雑用係をさせながら、狙撃の腕を磨かせた。二人の優秀な狙撃手を得たことで、張耀幇の戦果は飛躍的に上がった。名声と信頼を得ることで、依頼も増えた。

子耀攬把の前に出て、「相手は二十六人……、いや二十五人です」と報告した。子耀がニヤリと笑って、「まあ、大丈夫だろう」。四十人余りの匪賊を壊滅させたこともある。

「で、やつらの目的は？」

美虎はかぶりを振った。

「後で郷長をつついてみるか」

手付金として朝鮮銀行券で五百円、朱雀幇を潰したときの成功報酬は五千円だ。細々と高粱を作って暮らしている寒村に、簡単に支払える額ではなかった。

「よし、準備をしろ！」

攬把の一声で、朴兄弟以外は馬に乗った。馬上からではなく、物陰に潜ませて狙撃させる。そして、頭目を狙う。頭を潰せば決着は早い。

「明日は玉姫楼だな」

子耀がそう呟くと、下卑た笑いが響いた。いきつけの遊郭なのだ。馬賊に崇高な使命は必要ない。金がすべてだ。金さえあれば、酒も女も買える。

（つづく）

まちの古本屋さん
どら書房
古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

・無料本、百円本、50 円本などのコーナー。
・地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
※九日市の開催日は定休日でも開店します。

●庄原市中本町 2-1-10　●定休日：毎週日・月・火曜日（2月は在庫整理で休業）
●TEL: 090(9913)3052　●営業時間 9:30～18:30（昼食休憩 12:00～12:30）
※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

特別連載㊷

「旧暦」のカレンダーを見る

古川 行洋

第六部　旬と花を見る

今年の十月一日から三十一日は、旧暦では八月廿一日から九月廿一日です。

八月と九月の旬

リンドウ

リンドウは、本州～奄美諸島の山野に自生する植物で、近縁種も含めると、ほぼ日本全域に分布しており秋を代表する花とされています。根や茎が非常に苦く、熊の胆（い）より苦いため、竜の胆嚢（たんのう）という意味の「竜胆」という名が付けられました。



関東以西に多く自生する「リンドウ」や近畿以北に多い「エゾリンドウ」など、薬用に利用されるものも多く、薬として使われるのはひげ状になった根の部分です。

日光の二荒山（ふたらさん）神社では、ある行者が山奥で雪の下からリンドウの根を掘り起こしているウサギを見つけ、不思議に思いながらも、同じように根っこを持ち帰って病人に用いてみたところ、たちまち病気が治ったという伝説が残されていることから、霊草として扱われています。

さば（鯖）

鯖は日本で最も多く食べられている魚のひとつです。身にたっぷりと脂がのっているため、焼いても刺身にしても大変おいしい魚です。けれども、鯖の内臓にある酵素が大変強いため、漁獲したあとに大変傷みやすいのが難点です。いわゆる「足がはやい」と表現される代表的な魚です。

「鯖を読む」という言葉は、鯖が大変傷みやすいために、数をごまかして素早く数えたことに由来しています。鯖の身を塩と酢でしめたシメ鯖やバッテラ寿司は、鯖をおいしく保存するための加工ですが、鯖の脂と酢の酸味がほどよくかみ合うことで、ほかの魚にはないうまみを作り出しています。

サトイモ（里芋）

この芋のぬめりの正体は、タンパク質、多糖類のガラクタン、食物繊維のマンナンです。この芋は、ほかの芋類と比べると低カロリーです。

料理で芋を皮のまま蒸し、その皮を剥いで食べる料理を「きぬかつぎ」といいます。これは平安時代の女性の衣装である衣被（きぬかつぎ）ぎになぞらえて名づけられたものです。

また、この芋は親芋のまわりに子芋が付いて、さらに子芋の先に孫芋が連なるところから、子孫繁栄の縁起物とされ、お節料理に煮物として使われます。

くり（栗）

ブナ科クリ属の木である栗は、独特の香りを発する雌雄異花を咲かせます。雌花は三つの子房を持ち、受精すると、そこで果実である栗を実らせます。旬は九月～十月です。

多く出回っているのはニホン栗。中国栗は天津甘栗。マロングラッセに使われるヨーロッパ栗があります。

日本に限らず古来より、栗は身近な食物でした。縄文時代の遺跡から出土しており、縄文時代の日本では主食であったと考えられています。日本国内どこでも栽培することが可能で、京都の「丹波栗」（品種名は銀奇）といえば高級品、「栗の王様」とも呼ばれています。「丹波栗」は、平安時代からの特産で、朝廷や幕府に献上されていました。

ギンナン（銀杏）

秋になると雌株のイチョウに、丸い黄色い実を付けます。独特の臭いがする果肉のような部分を取り除くと堅い殻が現れ、その中にギンナンが入っています。殻をむいて、塩茹でや塩炒り、あるいは茶碗蒸しなどにします。一度にたくさん食べると中毒を起こします。また、漢方では古来より咳止め、夜尿症、頻尿の改善に使われていました。旬は九月下旬～十一月です。

インバウンド・ラプソディー②

1970年大阪万博（EXPO）開催

マック☆ヤマザキ



「こんにちは、こんにちは、西の国から、……　こんにちは、こんにちは、東の国から……♫」

三波春夫の明るく、よく通る声が1967年から、日本中あらゆるところで聞こえていた。1964年の東京オリンピック、その年開業した東海道新幹線、外国人観光客を迎え入れる新規ホテルも開業した。

インバウンド・ブームが押し寄せてきて、タクシーの運転手さんにも“英語”の必要性が迫っていた。1970年3月15日から9月13日までの183日間、大阪府吹田市・千里丘陵で「人類の進歩と調和」のテーマで大阪万博が開催され、期間中の総入場者数は6422万人。

77か国が自国のパビリオンで、自国を代表する商品、産物、観光地、食べ物などを知ってもらおうと宣伝活動。甲子園球場の83個分、約133万平方メートルの広さの会場（写真上）のシンボル『太陽の塔』には「お祭り広場」が設けられて、各国に一日を割り当てて、「ナショナル・デー」としてアピールする企画もあった。

入場するだけで4時間から5時間の待ち時間を必要としたのは、ソ連館とアメリカ館で、当時は宇宙開発競争でソ連とアメリカが鎬（しのぎ）を削っていた。ソ連は実物の宇宙船を吊り下げ、アメリカ館も負けじと、人類が初めて月に降り立った時の司令船や宇宙服、月から持ち帰った「月の石」が飾られていた。

異色の催し物もあった。3月21日と22日の2日間、水上ステージでフランスの“布の魔術師”ピエール・カルダンのファッションショー（写真下）が催された。会場の様子を詳細にお茶の間に紹介するのは、カラーテレビだ。

聞いたことのない国名を知り、日本とは異なった食べ物を試し、民俗楽器を使った迫力ある音楽やダンスに酔いしれた。ショーが終りに近づくと、司会者が「ご覧いただいたショーを直に体験していただくため、往復の航空券と宿泊施設を含む招待券をさしあげます！」。あらかじめ配布した券の当選番号を読み上げると、会場の盛り上がりは最高潮！

万博は、日本への外国人観光客の誘致促進だけでなく、日本人の海外旅行促進という効果も大きかった。航空会社、鉄道、バス、ホテル、旅館、飲食店、お土産店で働く人たちは休む暇がなかった。183日間にわたる体験は、旅行業界へのカンフル剤となった。

海外に関心を持ち、アウトバウンドの主役となりうるのが、田植え、稲刈りの農繁期を除いて、曜日に左右されない農民の方たちだと、我々旅行業者は注目した。やがて「ノーキョー・カンコー」と言う言葉がはやるようになった。

私の会社のアウト・バウンド部では、夕方になると洋式の便器の模型を担いで、ハワイへ出発前の説明会に出かけて使い方を実演？　ドアーを開けっぱなしにして隣の部屋に行ったら、オート・ロックで鍵が閉まって自室に戻れなくなり、ステテコ姿でフロントに助けを求めたエピソードも説明に加えた。



どらくろ俳壇＆歌壇

※参加を歓迎します。

長生きをしたいと歩く霧の中　近藤 昌平

深み行く霧の如き余命かな　原 博己

一瞬に観衆つつむ大花火　片岡 正人

夕焼けの空より来る秋の風　隆愚

八雲ノーベル子規も横顔秋うらら　大槇 三代子

鱗雲夢を語りし友は亡き　寺内 龍二

秋雲に寅さんの唄口ずさむ　赤川 冬人

一円玉天気と呼ぶと予報士は笑ひて言ひぬ崩れよう無しと　松岡 初枝

投稿＆寄稿

候のことば

「虹蔵不見」　隆愚

暦の二十四節気七十二候で十一月二十二日から二十六日頃を小雪の初候で「虹蔵不見」（にじかくれてみえず）の候といいます。七十二候の清明の末候（四月十五日から十九日頃）「虹始見」（にじはじめてみえる）に対応する候で、虹が見えなくなる時期という事です。雨の水滴がプリズムの役割をして出来るのが虹ですから、雨が少なくなるこれからは、見えなくなるというわけです。

昔は、虹は、龍が天に登る姿だと思われていました。「蔵」には「ひそむ」というニュアンスがあります。龍が再び天高く登れる日を、息をひそめて待っていると思ったのでしょう。

虹の色を、日本とオランダでは七色と言われますが、アメリカとイギリスでは六色だといわれています。また、ドイツとフランスでは五色だといわれています。

濃く見える主虹の外側に薄く見える副虹が見える事がありますが、主虹は赤色から紫色の順ですが、副虹は色の順が反対で、紫色から赤色の順になっています。

月夜に見える虹を「月虹」（げっこう）といいますが、月の光は太陽の光の四十万分の一の明るさですから、薄くしか見えません。

冬の虹消えむとしたるとき気づく　安住敦

「ＡＩと古本」　赤川 仁洋

どら書房ではネット販売をしているが、ある時期から急激に古本が売れるようになった。ある特定の３つの会社から、毎日のように注文が入る。新手の転売会社だろうか？　本の分野に統一がないのである。しいてあげれば、一昔前の専門書が多い。店のお客さんから、テレビニュースの情報を得た。アメリカのＡＩ開発企業アンソロテック社が、ＡＩに学習させるために日本の業者に依頼して、古い専門書を集めているという。ネット上にある情報であれば、ＡＩが自分で見つけて知識を蓄積できるが、紙の本の古い情報はどうすることもできない。それで人力で紙面をスキャンして、ＡＩに情報を取り込ませる。

ＡＩに興味はなく、できるだけ関わらないでおこうと思っていたが、そういうわけにもいかないようだ。スキャンするために本は裁断され、利用したあとは廃棄処分になる。思い浮かべたイメージは、巨大ロボットがバリバリと本を食べる光景。

ＡＩよ、せめて本を裁断しないでスキャンする方法を開発してくれ！



どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

― 硬式テニス参加者募集 ―

MTEC (Miyoshi Tennis Enjoy Club)
場所：三次運動公園の屋内＆屋外コート

・火曜日（9:30 ～ 12:00）
・水曜日（9:30 ～ 12:00）



《情報＆原稿を募集します!!》

●仲間募集　●教室＆講座案内
●イベント情報　●あなたの大切な本の紹介
●ボランティア・ライター(現地記者)募集！

※応募先はどら書房・赤川まで。
掲載は無料です。

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載して
いるので、ダウンロードして
お楽しみいただけます。



「旧暦カレンダー」（販売価格：1,650円）

・日本の自然に根差した暦（こよみ）です。
・太陽暦でも太陰暦でもない、「太陰太陽暦」です。
・新暦（太陽暦）も併記しているので便利です。
・季節の行事や呼び名の意味が、より深く理解できます。
・自然災害の予測ができます。

どら書房にて令和９年度版 予約受付中！
（12月初旬入荷予定）

※本誌特別連載の古川行洋氏推奨。

「ぐんぐん伸びよう会」（教室：川西町 241　連絡先：080-3631-9125 やない）



当教室では、一人ひとりに合った学習（ちょうどの学習）をし、年齢・学年に関係なく、生徒ができるところから始める学習法です。対象は、乳幼児～小学生。
教室とご家庭との二人三脚で子どものもっている可能性を伸ばしていきましょう。無料体験受付中！！
0~3 歳：4,000 円（週 1 回）。4 歳～小 6 生：算数＋国語（4,500 円、週 1 回）。お気軽にご連絡くださいね。

編集後記

◇11月号をお届けします。「新・芸備線ストロール」は七塚駅。わたしの句友で俳句の師匠、故・近藤昌平さんの生活エリアで、今でもばったり顔を合わしそうな気がします。バス停で初対面の女子高生に、俳句の勧誘をする方でした。◇出す出す詐欺？　が続いていました「倉田百三本」、「芸備線ストロール」「木次線ストロール」、今年中に上梓、あるいは出版予告を出したいですね。産みの苦しみ、実績のない自費出版の悲哀を味わっています。今後の出版は、印刷所の変更も含めて対処が必要です。◇寒くなってきました。炬燵を出すか迷っています。その前に部屋の片付けです。

発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町 2-1-10
☎090(9913)3052(赤川)
e-mail:touzin@nifty.com

誌面デザイン:ROUTE183
協賛：九日市愛好会

第301回

しょうばら九日市（くんちいち）

毎月九日に開催されている街角市場です。発祥は天正年間（1573～1591）、織田信長が安土城を築いたり、豊臣秀吉が大阪城を築いたころ、物々交換の市（いち）として始まりました。その歴史ある市が2001年に復活、地元の出店はもちろん、近隣他県からの出店＆名産品で賑わっています。



11月9日(月)
9:00～13:00

TOPICS

★市民ギャラリー「アート多愛夢」
11月9日（月）10時～14時
「お茶席（庄原茶道連盟）」

★どら書房、無料休憩室（漫画読み放題）
※本格コーヒー100円

★HONMACHI STAND→コーヒー100円引き

★キッチン北川・店頭販売（9：30開始）
※大好評のおいしいお惣菜がたくさん！

★あなたも自分のお店を出してみませんか？（出店者募集中！）

＊出店申込みは、【毎月２０日締切】　コンパネ１枚スペース１，２００円～
九日市愛好会事務局　FAX（０８２４）７２－８２８５
〒７２７－００１３　庄原市西本町２－１－１０（楽笑座内）

【ホームページ】
http:www.kunchi-ichi.jp